

平成 26 年度 インクルーシブ教育システム構築モデル事業 成果報告書Ⅰ
【インクルーシブ教育システム構築モデルスクール】

法人名	広島大学
-----	------

概 要

モデルスクールの概要（平成 27 年 3 月 1 日現在）

	モデルスクール名	在籍者数	教職員数
1	広島大学附属東雲小学校	490 名	27 名

【事業概要】

1. モデルスクールの特色（特別支援教育に関する事項）

本校には、単式学級・複式学級・特別支援学級（知的障害）があり、日常的に各学年内での交流や学校全体の縦割り活動、学校行事によって共生意識の向上を図っている。これまでは、通常の学級と特別支援学級との国語や算数などの教科による交流の授業は行ってこなかった。しかし本校内外においても交流における合理的配慮の事例蓄積や連続性のある多様な学びの場についての検討が喫緊の課題となってきた。

そこで、本校及び他校で学ぶ障害のある児童の個別のニーズに的確に応えるためにも、平成 25 年度から本事業の指定を受け、特別支援学級と複式学級の教科による交流及び共同学習の可能性について検討、試行を行ってきた。また、先進的な取組を行っている特別支援学校や総合教育センター等を視察したり、特別支援学校から講師を招いた研修会などで通常の学級の担任にも配慮を要する児童について学ぶ機会を設けたりした。

こうした取組の中で、交流及び共同学習を進めていくためには、通常の学級の教員も、合理的配慮についての知見を深め、実践していくことが必要となってきた。また、通常の学級にも配慮を要する児童がいることから、特別支援学級の授業作りから合理的配慮や手立てなどを参考にし、個別のニーズにどう対応していくかを検討していく必要性が高まってきている。

2. 取組の概要

本年度も昨年度に引き続き、通常の学級担任による先進校視察、研修報告に加え、特別支援学級の指導案作りを全校で取り組んだ。本校は、大学の附属学校として、教科学習や教科の授業作りについて取り組んでおり、それぞれの教科を専門とする教員が配置されている。こうした強みを最大限生かし、特別支援学級における教科指導や通常の学級におけるユニバーサルデザインの授業に、新たな知見をもたらすことができるのではないかと考える。特別支援学級に在籍する児童への合理的配慮から、通常の学級における合理的配慮にも視野を広げ、取組を進めていきたい。

研究推進に当たっては、合理的配慮記録員を2名配置し日々の特別支援学級における授業や生活を中心に1人1人の児童の日常的な合理的配慮を記録していく。月に1回程度、インクルーシブ推進会議を開き、授業の記録から合理的配慮の在り方等大学教授から助言を受けた。また、合理的配慮についての理論研修や特別支援学級の指導案を全教職員で試作する研修等を行う。特別支援学級の児童の実態把握やそこからどう手立てや支援を考えていくか等を検討していくことで、通常の学級に在籍する配慮を要する児童への合理的配慮を検討していくきっかけとする。本校の計画が本事業の趣旨と合致し広く世の中に役に立つと考える。

3. 成果及び課題

大学教授による全教職員を対象とした研修会を開き、「インクルーシブ教育システム構築に向けた課題と合理的配慮・基礎的環境整備のあり方」を考える場を設けた。その中で、合理的配慮の必要性を学びながら、子供同士で教え合うピア・チュータリングやワークショップ形式の学習方法など多様性のある児童の学びの具体的事例を知ることができた。これは、単に障害がある児童がクラスにいなくても日々の学習活動において有効であることや、逆に日々行っている学習活動の中にも視点を変えればインクルーシブ教育を推進しているということを知ることができた。また、校内研修で通常の学級担任による特別支援学級の指導案作成を試みた。同じ校内においても児童の実態把握やそれをどう捉え目標設定するかというこれまでほとんど経験していなかったフィルターを通した指導案作成では、新たな知見を得ることができた。さらにこれをきっかけに、実際に特別支援学級と通常の学級とが交流の授業を実施したり通常の学級担任による特別支援学級児童対象の授業を行ってみたりとその動きを見るだけでも意識が変わってきた。同時に、通常の学級における配慮を必要としている児童に対する合理的配慮の在り方の研究が本校の次の課題である。